

# 関西帰国生親の会かけはし会報

Vol.36 関西帰国生親の会かけはし [kakehashi@kansai.email.ne.jp](mailto:kakehashi@kansai.email.ne.jp)

今年も多くの方々のお力添えをいただいたおかげで、9月に『帰国生への学校案内《関西》2017』を無事発刊することができました。かけはしへのご支援に深く感謝申し上げます。学校訪問の記事や、出国前から帰国後にわたる教育情報、海外での学びの体験談などがみなさまのお役に立ちますよう、会員一同願っております。

海外での生活は子どもたちにかげがえのない経験をもたらす反面、日本語に接する機会の減少も伴います。日本人学校や補習授業校に通学していても、暮らしのなかで見聞きする日本語は限られるものです。また、外務省の海外在留邦人子女数統計では、これらの学校に在籍せずに現地校やインターナショナルスクールに通う小・中学生の割合は年々増加し、現在、半数近くを占めています。このような背景もあるからでしょうか、かけはしの教育相談や「レッツトーク」などで、保護者の方々から帰国後の学びへの不安や戸惑いがよく聞かれます。そこで、自省の念も込めて、本会報は「海外で暮らす小さい子どもの日本語教育」をテーマといたしました。日本の小学校や在外教育施設で子どもたちの指導に当たってこられた先生方にお話をうかがい、また、母語を育てる工夫についての保護者アンケートの結果をレポートにまとめました。海外での生活を充実させるなかで日本語の力をつけることは容易ではないかもしれませんが、ご家族で楽しみながらお子さんの興味を広げられる手がかりとなりましたら幸いです。

関西帰国生親の会かけはし代表 青木 真子



## 目次

* ご挨拶	関西帰国生親の会かけはし代表 青木 真子	1
* 特集 一幼少期の日本語教育一		
「幼少期の日本語の大切さ」	海外子女教育振興財団 関西分室 教育相談員 菅原 光章	2
「幼少期の日本語教育」	ローリー日本語補習学校 校長 伊井 直明	5
* かけはし保護者体験談「教育言語ー我が家の選択」	かけはし会員 辻本 由峰子	8
* かけはしレポート (第14回) 「海外で子どもの日本語の保持・伸長に役に立ったもの」		9
* 異文化でドッキリ! <道具編>		12
* 海外の学校を紹介します 「ブラッセル日本人学校」	A. Y.	13
* 学校案内編集部より・「レッツトーク 2016 秋」実施報告		14
* 会員のつぶやき・編集後記		15
* 『帰国生への学校案内《関西》2017』・かけはし賛助会員のみなさま		16

(敬称略)

## 「幼少期の日本語の大切さ」



公益財団法人  
海外子女教育振興財団 関西分室  
教育相談員 菅原 光章 先生

奈良市立の小学校で教頭・校長を歴任。1983年より3年間台湾台北日本人学校教諭。奈良県国際理解教育研究会にも所属し、国際理解教育に尽力される。退職後、同志社国際学院初等部教育サポーター、今年4月より海外子女教育振興財団関西分室教育相談員。

— 教育相談のなかで、最近はどのような内容が増えていますか。

- ◆ 二つの傾向があります。幼児や幼稚園児を連れて行かれる方と中学3年生や高校生を連れて行かれる方が増えていますね。共通して言えるのは、お母さまが「大丈夫だろうか」と不安に思って同行するかどうかなど迷ってらっしゃることです。お子さんが大きいと、帰国後にどういう高校に入れるのか、大学受験はどのようなのかと悩まれている方が多いです。お子さんが小さい方は、行った先で子どもの幼稚園や学校はどんなものがあるのか、幼稚園児の場合には小学校は日本人学校と現地校のどちらがよいのか、帰国後のことも含めて進路についての相談があります。英語でつまづかないか、日本語を忘れていかないか、日本語力が落ちないか、いじめられないか、さまざまなことを心配されています。

— 相談員になられてから、一番心をくだかれていらっしゃることは何でしょうか。

- ◆ 子どもたちが、日本から海外に出て、逆に日本に戻ってきて、新しい環境になじむことができるだろうか、なじんでいるだろうか、そういうことが心配です。私が台湾に赴任した30年前は帰国生がまだまだ少なく、世間一般の風潮が帰国生に対して厳しい時代でした。今はだいぶ変わっていると思いますが、文化や言語の違うところに入って行って、子どもたちがいろんな面で苦労しているのは間違いありません。帰国しても同じで、親は日本に帰るという気持ちでいますが、子どもは日本から外国へ行ったときと同じように二回目のカルチャーショックを受けるわけです。そのことで苦労するだけだったらよいのですが、学校に行きたくないとか、家に引きこもりがちになっていないかとか、子どもたちが辛い思いをしていないかという思いがあります。

— 海外では日系幼稚園や日本人学校、現地校、インターナショナルスクール(以下インター校)などから学校を選ぶこととなりますが、どのような学校を希望されるご家庭が多いですか。

- ◆ 現在8万人の子どもたちが海外で生活していて、日本人学校に通う方の比率が25%くらい、それ以外は補習校に通っている方も入れて現地校やインター校です。アメリカではニューヨーク、シカゴ、ニュージャージー、イギリスではロンドンのように日本人学校があっても現地校やインター校を選ぶご家庭が傾向として増えています。小さいお子さんの場合、日本人学校に附属している幼稚園や日系の幼稚園もありますが、現地やインター校の幼稚園に行かれる方が多いのではないのでしょうか。相談員としての経験からお話すると、2~3年の短期滞在の場合は日本人学校があるならそちらに行かれるのがよいと思います。長期の場合、英語や現地の言葉を学びたいなどはっきりとした目的があれば、現地校やインター校を選択肢のなかに入れてもよいのではないかと思います。日本人学校がなければそれらの学校になりますが、小中

学生にとってはとても大きなギャップがあります。英語力があるお子さんならまだしも、ほぼ英語ができない多くの子どもは、ESL(English as a Second Language)クラスなどで英語学習の補助があったとしても、現地の言葉で授業を受けて理解するまでにはかなり時間がかかります。以前勤めていた学校で、アメリカから6年生のときに帰国した子どもが「全く英語ができなくて、とんでもなく苦労しました。普通はもっと早くESLクラスを卒業するのだけど、僕はそこに2年間いました」と話していました。個人差はありますが、ようやく英語を習得したところで、さあ帰国というケースが多くあります。ですが、親が子どもの進路を考えて現地校やインター校を選び、未来を築かれている方もいますから、何が正解かはわかりません。

— 海外赴任が決まると、親は子どもに日本語も英語や現地の言語もできるようになってほしいと欲張りたくなるものですが、気をつけるとよいことはありますか。

◆ 子どもをどう育てたいのか、親がしっかりした考えを持つことが大切だと思います。英語力についても、周りの人の話に流されて安易な選択をしてしまうと、後でしまったということになりかねません。また、親が揺れてしまうと子どもが中途半端になってしまいます。一旦方針を決めたら、その方向で子どもは努力し、親は経済的な支援や精神的な支えで協力し、家族が一致団結して取り組むことが大切です。

— 「幼少期の日本語教育」について先生のお考えをおうかがいしていきたいと思います。幼少期の子どもが言葉を身につけていくうえで大事なことや大切な時期はどのようなものだと思いますか。

◆ 子どもの年齢が低ければ低いほど、いろんな経験が言葉と結びついて語彙を増やし言語面を発達させていきます。日本語環境をしっかりと作り、さまざまな体験を子どもたちにさせてあげることが大事だと思います。「10歳の壁」という言葉があります。3~4年生の時期に子どもたちが大きく変容しますが、これが言語習得と重なると思うのです。10歳までに母語としての日本語のベースを作っておくことがそれ以降の日本語能力に大きくかかわってきます。子どもが小さいときに海外へ連れて行くと、あっという間に現地の言葉を覚えて我が子が天才のように思えますが、それはオウム返しのようなもので言葉が定着しているわけではありません。帰国するとすぐに忘れてしまうことが往々にしてあります。それが脳の仕組みだと思うのです。言語学者の中島和子さんが『言葉と教育』という書籍で、0歳から12歳までが言語形成のなかで一番大事なときだとおっしゃっています。12歳までに日本語をきちんと習得した子どもたちは、海外に行っても英語や中国語など第二言語の習得で大変であっても、滞在期間が長くなるにつれて言語理解が母語を超えてくるということを書かれています。現場で勤めていたなかで共感することが多いです。

— 今の子どもたちはテレビやラジオだけでなく、ゲーム機、携帯電話、パソコン、タブレットなどさまざまな情報機器に囲まれています。親はどのように対応するとよいでしょうか。

◆ 昔は「テレビに子守をさせるな」といいましたが、今の時代においては、スマホづけ、タブレットづけにするなということです。子どもの機嫌はよくても、コミュニケーションが成り立っているわけではなく、一方的なものですから脳によくありません。それよりも子どもたちが楽しいと思える経験をさせてあげましょう。自然のなかでの虫捕り、絵本や小説の楽しみ、映画での感動など。テレビやスマホやパソコンは使い方次第でものすごく良いものにも悪いものにもなります。親も自己規制しながら、特に小さい子どもには情報機器の上手な使い方を教えるかわら、さまざまな感動体験ができるような環境を与えてあげると、子どもたちがそれらにどっぷりつかるとはならないと思います。

— 母語としての日本語習得を考えて、海外では子どもの幼少期に親はどのようなことを心がけるとよいでしょうか。

◆ 現地校やインター校では英語や現地の言葉のシャワーを浴びてその言語を習得し、家の中では日本語で生活するという使い分けをすることです。日本語で話をする、日本のテレビを見る、日本語の絵本や本を読むなど、日本語の環境を意図的に作ることが大事だと思います。会話は、言葉のやりとりというよりは

気持ちのやりとりです。英語をしゃべったらダメと規制するのではなく、子どもの返答が英語や不完全な日本語であっても、話の流れに応じて、それは違うからときちんとした日本語で言い直してあげるときもあるし、その場は聞き流してあとで正しく言ってあげるのがよいときもあります。実際の生活ではなかなか難しいことですが、親が意識的にアンテナを張って対応すれば、帰国したときに子どもたちが違ってくると思います。毎日の積み重ねは大きいと思います。

— 海外で生活していると日本語の会話は家庭内に限定されることも多く、特に母親の使う言葉が子どもの言葉の核になるかと思われます。正しい日本語を話さなくてはいけない母親の責任は重大ですが、もし意識できるものならば、どんなことに気をつけて母親は子どもと会話するとよいとお考えでしょうか。

◆ 日常生活の会話では、「はい、ごはん」「お風呂よ」と単語で話すご家庭が多いものです。「ごはんができたよ」「お風呂に入れるよ」など、文を作って話すよう気をつけるとよいでしょう。また、親はイエスカノーで返ってくるような言葉を言いがちです。「宿題できた?」「できた」、「学校楽しかった?」「うん」。これでは会話はすぐに終わってしまいます。「今日はどんな宿題が出たの?」「今日の学校はどうだった?」と言い方を変えるだけで、子どもは考えて答えるようになります。大事なことは、日本語で考えて日本語で話すということです。毎日の積み重ねですから、親が意識するかどうかで後々違ってきます。国語として勉強するだけでなく、毎日の生活の中で取り入れるようにしたらどうかと思います。

— 日本語能力を高めるために、子どもの年齢に応じて家庭ではどんな工夫ができるでしょうか。

◆ 小さいお子さんには日常会話で足りない工夫をされるとよいでしょう。好きな絵本を読み聞かせるときに、「どんな気持ちだったんだろう」「どうしてこんなことしたんだろう」と子どもに日本語で考えさせる質問をして、日本語で答えさせる。「こうだったんちゃうかな」とか「これはどう思う」とか言うだけでも、会話が成り立ちますよね。大きなお子さんの場合には、面白い本や映画や人に巡り合える環境を作ってあげると自分から興味を持って調べます。高学年になると知的な好奇心が高くなり、大人が思う以上に高いレベルを要求してきます。そういうことを伸ばしてあげたらよいと思います。日本の小学校で英語活動をしていたときのことですが、ワーキングホリデーの経験があり英語がペラペラな方が指導したのにうまくいかなかったことがありました。1~2年生にはおもしろい題材でも、照れがある6年生には題材のレベルが低すぎたのです。それがあつた大学生が教えたときには、子どもたちがめっちゃくちゃのつたんです。英語のレベルとしては初歩的なものでした。しかし、6年生の知的な好奇心をくすぐるような工夫がされており、子どもたちにレベルが高い内容を体験している気持ちにさせていたのです。要は、年齢に応じた知的な好奇心を刺激する環境を作ったり工夫したりすることが大切なのです。

— これから海外へ行かれる方や海外で暮らしている方へメッセージをお願いします。

◆ いろんな宝物をいっぱい見つけてきてください。人、文化、自然。将来、何かに役立つものがたくさんあると思います。海外では健康面や生活面、安全面など苦労することはありますが、マイナスと考えずにまたとないチャンスだととらえて生かしていく。お父さんやお母さんが前向きな気持ちでいると、子どもたちもきっとそうなります。海外での経験は人生の中で宝物になると思います。

— お忙しいところ、貴重なお話をありがとうございました。

#### インタビューを終えて

お話をうかがって、優しいまなざしで子どもたちを温かく見守る先生のお姿が目につきました。些細な、さりげない工夫の大切さ。それを子どもが幼いときから日々積み重ねていくことの重要性。親として、先生のお言葉をかみしめ、かなうことならもう一度子どもを育ててみたいと思いました。先生のますますのご活躍を願っております。

## 「幼少期の日本語教育」



### ローリー日本語補習学校 校長 伊井 直明 先生

大学卒業後、公立学校教員(主に小学校)となる。兵庫県教育委員会事務局指導主事、公立学校教頭、バンコク日本人学校で勤務する。帰国後、再び県教委主任指導主事として外国人児童生徒の受け入れ、日本語指導等の企画・指導に携わる。その後、公立学校長となり現在に至る。(教育学修士)

- まずはローリー日本語補習学校についてお聞かせください。
- ◆ アメリカ・ノースカロライナ州にあるローリー日本語補習学校は幼稚園部から高等部まであり、生徒は200人あまりです。いずれは帰国する生徒とずっとこちらに住む生徒は6:4の割合ですが、年々こちらに住み続ける生徒の割合が増えています。週1回土曜日に5時限授業を実施しております。
- 現地校と補習校との掛け持ちで日々子どもたちは大変だと思いますが、子どもたちの様子はいかがでしょう。みなさんは生き生きと通っていますか。
- ◆ 日本から来たばかりの子どもたちは、言葉の問題があり現地校に慣れるまで本当に大変です。現地校へ入学してからの数週間、彼らは日々極度の緊張感を持ち続け登校しています。ESL(English as a Second Language)クラスも設置されていますが、彼らの抱える日々のストレスは相当なものようです。補習校での国語の時間に作文を書かせると、堰を切ったように現地校での生活について書き始めます。また、補習校での学習に関しての悩みも大きなものです。小学部5年生までは国語と算数、6年生以上では社会科の学習も加わります。圧倒的に授業時間数が少ないため、授業はとても速く進み、生徒や家庭の負担が大きいのも特徴です。それでも日本語で学習をすすめる補習校は、彼らにとって「安らぎ」を得るオアシスのような存在となっています。
- 先生が日頃子どもたちに意識して声掛けしていることは何かありますか。
- ◆ いつも次のように話しかけ、励ましています。「君たちは、お父さんやお母さんの宝物であると同時に、日本にとってもアメリカにとっても宝物です。それは、あなたたち一人ひとりが、日本とアメリカという二つの国を今以上に仲良くさせるための大きな力となるからです。あなたたちは現地校に通い英語で会話ができるだけでなく、アメリカ人の考え方や行動をよく理解しています。このことは、とても大事なことです」「校長先生は日本人学校でも働いていましたが、補習校の子どもたちが二つの言語で勉強しなくてはいけないために何倍も苦勞していることを知っています。しかし、この苦勞がこれからの人生を一層たくましく生き抜く力になると思いますよ」。
- 日本の子どもたちとローリー日本語補習学校の子どもたちに何か違いを感じることはありますか。
- ◆ 「素直さ」を強く感じています。当地では、移動は車か飛行機です。子どもたちは、日本のようにバスや電車などの公共交通機関を利用して、自分で移動することはありません。必ず両親等と一緒に移動します。つまり、子どもの交友関係やし好などは保護者がすべてを把握しているのです。そのせいなのでしょうが、子どもたちはとても子どもらしくて、日本の子どものように「世間ずれ」がないのです。高校生がこれほど素直なのかと驚いたこともたびたびあります。

一 では、先生のこれまでのご経験から、日本語教育についてのお考えをお聞かせください。日本語を習得するのに、大切な時期というものがあると思われませんか。

◆ 言語の専門家ではありませんので、経験則を基にお答えします。日本語習得にはいくつかの大事な時期があると思います。

本校小学部入学生の多くは4月の段階で基本的な日本語を問題なく話しています。また、教師の指示や質問へ正しく反応もしています。これは各家庭の日本語環境によってなされたことですが、4歳から6歳にかけては日本語の基礎・基本の部分を習得する大事な時期だと考えています。この時期には、日本語のシャワーを浴びれば浴びるほど日本語が豊かになっていきます。

また、小学部3~4年生にかけては「3,4年生の壁」と言われ、日本語学習がとても難しいと感じる子どもや保護者が増えてくる時期です。「へん」と「つくり」が組み合わさった新出漢字をこの2年間で400字も習得しなければなりません。国語科の学年目標も「経験したことや想像したことなどについて、順序を整理し、簡単な構成を考えて文や文章を書く能力を身につけさせる」ことから、「相手や目的に応じ、調べたことなどが伝わるように、段落相互の関係などに注意して文章を書く能力を身につけさせる」と高度な内容に発展しています。

一方、中等・高等部生徒の「敬語表現」に注目すると、敬語を活用できている生徒は限られています。敬語の使用には単に言葉を理解しているだけでなく、互いの関係性や場の雰囲気、さらに他人への気遣い等が必要です。よって、敬語の習得には小学部高学年からの敬語学習や実際に活用する体験活動が欠かせません。言葉は学習と体験を積み重ねることで、習得され定着すると考えています。

一 先生方が日本語を教えるにあたり、一番気をつけている点は何でしょうか。

◆ 子どもたちの学習意欲を高めることを重視しています。毎日英語のシャワーを浴び、日本語は各家庭と週1回の補習校だけといった子どもたちが少なくありません。また、家庭で浴びる日本語のシャワーには各家庭で大きな差がありますので、その点も配慮しなければなりません。授業のモットーは「楽しく、よくわかる授業」です。各先生方へ子どもたちの学習意欲を刺激しながら授業を進めるようお願いしています。そのために、視覚教材を用いて理解を促進させたり、授業中に「動作」を取り入れたり、また、先生が自作した教材をゲーム感覚で取り入れる等、楽しく学習を進める工夫しています。各種コンクールへの参加を呼びかけたり、全校で「文集づくり」に取り組んだり、弁論大会を開催したりなど、単なる座学としての「日本語授業」だけでなく、変化に富んだ「日本語授業」となるよう取り組んでいます。

一 母語としての日本語習得のために、子どもの幼少期に親ほどのようなことに心がけるとよいでしょうか。

◆ 当地で二人のお子さんの日本語完全習得を成し遂げた母親の実践を基にお話しします。

彼女は、最も重要なことは「保護者の意識と実践」だと話しています。日本語習得の「目標」を常に忘れないようにし、日々徹底して取り組んだそうです。子どもたちが小さいときは「環境づくり」に配慮して日本語のみの環境を作りました。日本のテレビ、ビデオを見せたり、日本語を話す子どもたちと遊ばせたり、ピアノの先生も日本人を捜したりしたそうです。お子さんたちはアメリカ生まれでしたので、現地のプレスクールにも通わせましたが、そこでの時間はできるだけ短くして、可能な限り日本語環境の整備に努めたようです。日本語レベルをどの目標値に定めるのかによって、環境づくりや実践が大きく変わります。永住のお子さんの保護者の多くは、日常会話ができればと考えていますが、いずれは日本に帰る生徒と同様の日本語レベルを目標値としている保護者もいます。日本語習得の目標レベルを明確にすること、そのための環境づくり、そして、日々の実践、これらのことが重要だと考えます。

一 子どもにこのような発言、行動が現れたら「もっとしっかり日本語の勉強をさせないといけないぞ」というようなサイン等はなにかありますか。

◆ 兄弟姉妹の会話が英語になったとき、要注意だと思います。また、日本語で尋ねているのに英語で返事が戻ってくる時なども問題です。適切な「動詞」を用いることなく、「する」で表現したときは(例えば「口笛を吹く」⇔「口笛をする」など)気をつけて指導しています。

— 日本語力をつけるために、家庭で何かサポートができることはあるでしょうか。

◆ さまざまな機会を設けて日本語を聞き、話す時間を作ることです。「日本語のシャワー」の中で過ごす時間は本当に重要です。日本人が集まる行事などへ子どもを連れていくこともいいですね。また、保護者と一緒に日本語の宿題をすることもよい方法です。保護者は宿題を通して子どもの日本語力を把握でき、そしてその対応策も宿題を通して進めることができます。日本語環境を整備し日本語使用についての自信を持たせると、日本語について、また、日本に関連した事柄について興味や関心を持つようになります。ある程度の日本語能力があり、日本への幅広い興味が起きれば自ずと日本語学習は継続され、発展します。環境整備と自信や興味を持たせることが大事です。

— 子どもたちは平日は現地校での勉強プラス習いごとで毎日ヘトヘトで、帰国後に必要なことだとはわかっていても補習校の学習や宿題が二の次になってしまいがちです。無理してでも日本語の学習はさせた方がよいのでしょうか。

◆ 保護者がどのように考えるかです。実際に本校でも「補習校の宿題が多くて、夜遅くまで泣きながら勉強しています」「日曜日しか遊べていません。とても 9 歳、10 歳の子どもの世界とは言えません」等の意見を言われる保護者の方がいらっしゃいます。確かに子どもたちにとっては厳しい現実です。しかし、それに果敢に取り組もうとしている子どもたちもいます。それは、保護者が我が子の将来に対して確かな考え(目標)を持ち、物心両面にわたる適切な励ましと支援があるからです。つまり、これは保護者自身の課題であると考えます。

— 最後に、現在海外に滞在中のみなさんへ、またこれから海外に出る方たちにアドバイスをお願いします。

◆ まず、滞在中の方へは、子どもたちの目標を明確にし、それに対しての確実な取り組みを徹底して、継続して行うことの大切さを繰り返しお伝えします。目標を忘れてたり、いとも簡単に変えてしまったりしないことが肝要です。補習校の学習環境は大変厳しいものです。日々の努力なくして、目標の達成はありません。また、その努力を子どもだけに押し付けてもよい結果は生まれません。保護者も子どもと一体となって取り組むことが不可欠です。第一の学校は現地校です。第二の学校は補習校です。そして、第三の学校は「家庭」なのです。次に、これから海外へ出る方へのアドバイスです。多くの方は新たな生活に早期になじめるようにと、英会話を学んだり海外の学校情報を収集したりするなど、積極的に対応されています。これはとてもよいことだと考えます。ところが、実際の海外での生活は想定したことと大きくかけ離れていることが多々あります。そのようなとき、「こんなはずじゃなかった。困ったどうしよう」と思うのか、「こんなものかな、海外だからしかたない。工夫して何とかやってみよう」と思うのか。実はここが大きな分岐点なのです。海外生活は、「タフな精神」と「大らかな心」なくして通用しません。

皆さまのご活躍を心よりお祈りしております。

— お忙しい中、大変貴重なお話をありがとうございました。

#### インタビューを終えて

海外に滞在して子どもを現地校やインターナショナルスクールに通わせると、日本語の習得ということが気がかりです。そんなときに大切なのは、子どもの将来にしっかりとした目標を持って、親は環境を整えて子どもを励まし続けること。第三の学校である「家庭」が大きな役割を果たすべきなんですね。

## かけはし保護者体験談

### 「教育言語 - 我が家の選択」

かけはし会員 辻本 由峰子

2001年の夏、夫の転勤で小学1年生の長男と3歳の次男を連れてアメリカに再赴任したとき、迷わず近所の現地校に入学させました。長男はアメリカ生まれでもあるし、小さい子どもはすぐに英語が身につくと思って現地校を選びましたが、実際にはそんなに甘いものではありませんでした。ESL(English as a Second Language)クラスのある学校、理解ある担任の先生、他に日本人のいないクラス、リーディングの取り出し授業があるという英語習得に抜群の環境の中でも、長男は不自由なく会話するのに1年はかかりました。言いたいことがうまく伝えられないのに文句も言わず学校に行く長男が、「ここはお父さんが選んでくれた学校だから、僕、がんばるねん」と言ったことは今でも忘れられません。一方、幼い次男なら簡単かと思えば、現地のナーサリー(保育園)に行くのを泣きわめいて拒絶する毎日で、言語環境が変わることは子どもにとってはたいへんなことだと痛感しました。滞在して3年が過ぎるころには二人とも英語での生活にすっかり慣れ、親としてもほっとしていました。これからさらにステップアップできるだろうと思った矢先に帰国が決まり、3年半のアメリカ生活を終えて大阪の小学校に編入することになりました。

アメリカ滞在中に、バイリンガル研究に関する本を読んで、バイリンガルとは2カ国語をただ話せることではなく、それぞれの国での高校卒業レベルの語学力が身につけていることをいい、そうなるにはまず土台となる第一言語の母語をしっかりと育てないと中途半端になるということを知りました。特に小学校中学年では学習言語を変えない方がよいとされていましたが、4年生の3学期に帰国した長男は、ちょうどその時期にあたり、不安になりました。帰国すると、1年生に編入した次男に比べて、長男は日本語にとっても苦労しているようでした。アメリカの学校生活で、いろいろな「できない」を乗り越えせつかく「できる」ようになったのに、帰国してまた「できない」状態にさせてしまったため、親の都合で移動させたことを子どもたちに本当に申し訳なく思いました。そこで、子どもたちが学習言語で振り回されないように、「今後はいつどこに転勤しようと、日本語でまずしっかりと育てよう」と夫婦で決めました。そして、長男が中学2年生、次男が小学5年生でオランダに引っ越すことになったときには迷わず日本人学校を選びました。このときは学習言語が変わらなかったため、子どもたちはオランダ生活にすぐに適応しました。特にそこで思春期を迎えた長男は、よい先生や仲間たちに出会え、2年間で精神的にも大きく成長して、彼のターニングポイントになったようです。将来進みたい道を見つけたのもこのころでした。

帰国後は二人とも大阪の公立高校に進学しましたが、英語学習は他の生徒より有利で小さいころの現地校での経験がようやく役に立ったと感じました。しかし、だからと言ってアメリカの大学に進学しようとは思わなかったようで、今は日本の大学でそれぞれの進みたい道に向かってがんばっています。彼らの中では現地校での経験はすでに過去の一部分になっているようです。海外での生活が、その後の成長により影響を与えるようにと一生懸命サポートしてきたつもりですが、親が思うほど子どもたちはこだわっている様子もないので、もうこれ以上私が出る幕はなさそうです。楽しいことも苦しいこともあった海外での生活を通して、世界は広く多様であることを肌で学び、グローバルな意識が育まれたことは彼らにとっての宝だと思います。

本人の意思とは関係なく親の都合で海外の学校で学ぶ子どもにとっては、親だけが頼りです。年齢も性格も環境も一人として同じことはなく何が正解かわかりません。自分の子どものことを一番よく知る親がその子に合ったものを選び、価値のある海外生活を送ってほしいと願っています。苦労があってもこれはチャンスだと信じて、日本の生活だけでは育たなかったであろう個性をいつまでも大切にしてほしいと思います。



## かけはしレポート (第14回)

### 海外で子どもの日本語の保持・伸長に役に立ったもの

#### ・はじめに

現地の学校やインターナショナルスクールに通う海外で生活をする子どもたちは、当然のことですが、学習言語となる英語や現地の言葉に触れる時間が長く、その言語の理解が進んでいきます。その反面、なかなか触れることのできない日本語の保持や伸長を考えると、何かしらの努力が必要となります。しかし、親としては、「子どもの海外での学校生活を充実させてあげたい」との思いも強く、日々の生活ばかりに目が向いて、それだけでいっぱいになってしまいます。「いずれ帰国して、日本の学校に子どもは通うのだから日本語の勉強は大事である」ということは頭でわかってはいるけど、つい後回しになり、日本語の学習時間や力の配分が少なくなりがちです。そのため、「帰国後に本当に苦勞をした」「日々苦勞をしている」といった話は「かけはし」の会の内外でもよく聞かれます。特に言語形成期に子どもが海外生活を送る場合には、母語の学習の重要度は高いと多くの学者が唱えています。

今回のレポートは、「海外ではどのような物やことが日本語の保持・伸長に役に立ったのか」について、帰国生の親へアンケート調査を行い、それをもとに考えてみることにしました。通常、「かけはし」では、企業や商品の固有名詞は使用しません。しかし、アンケート回答に具体的な名称が多かったので今回は使用することにしましたが、宣伝の意図は何もないことをご了承いただきたいと思います。会員をはじめとする帰国生の親の経験談が、現在海外で生活している方々やこれから渡航される方々の、日本語の保持や伸長へのヒントとなれば幸いです。

#### ・アンケート調査について

- ① 目的：海外生活において日本語の学習に役に立ったものの調査
- ② 実施時期：2016年10月
- ③ 対象：かけはし会員を中心に、知人や友人の帰国生の親46人
- ④ 質問：海外で日本語の力をつける、あるいはキープする上であなたのお子さまにはどんなものが役に立ちましたか。またその理由。(自由記述・複数回答あり)

#### ・結果と考察

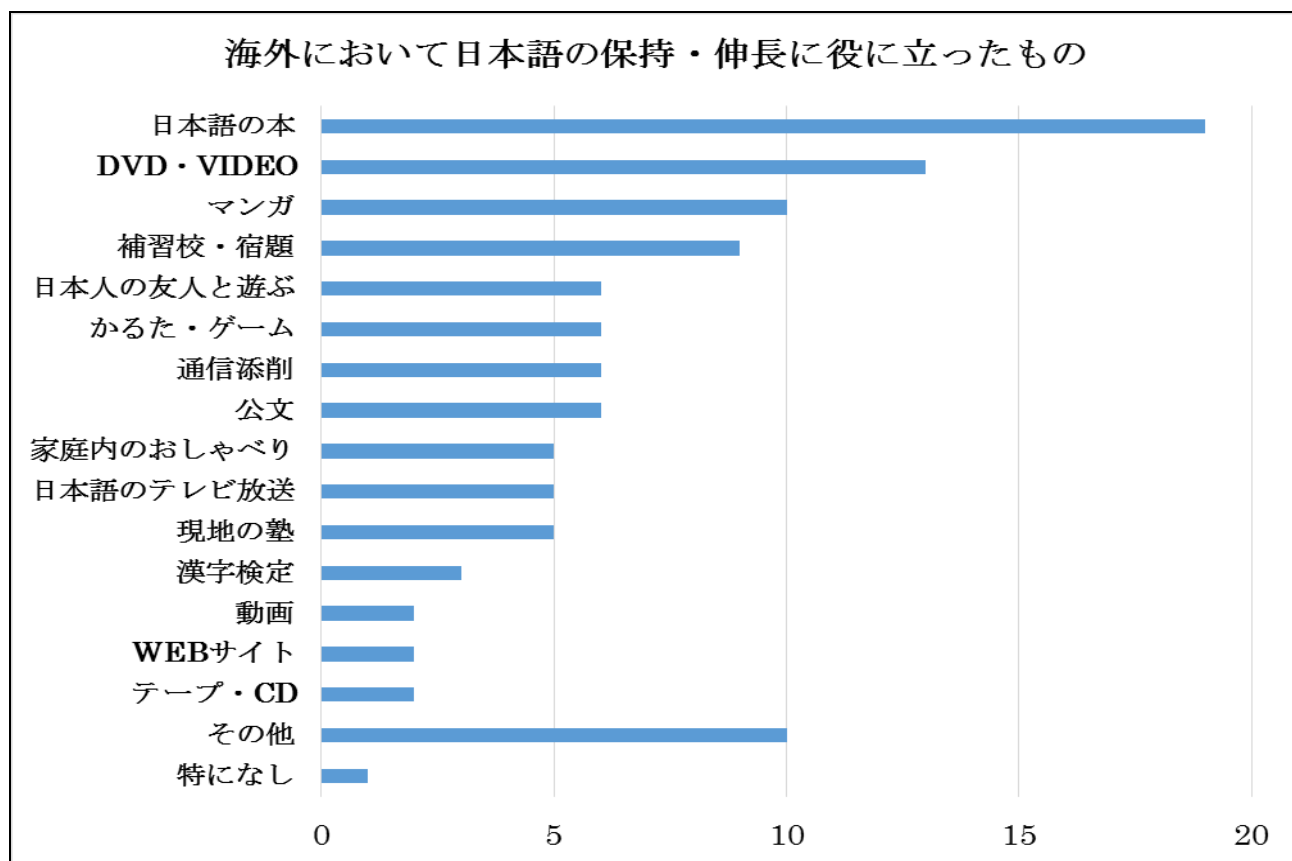
##### 海外で日本語教育に役に立ったものとその理由

アンケート結果はグラフのとおりです。自由記述のため、回答をカテゴリー別に分けてまとめました。文章中のカッコ内の数字は回答人数です。総回答数は97でした。

圧倒的に多かったものは、「日本語の本」(19)でした。つまり、「読書」です。年少者には「絵本とその読み聞かせ」が役に立ったとのことでした。理由は、「正しい日本語に触れられた」「日本や日本語への興味が持続した」「現地の歴史もわかった」「本を読んでいる限り日本語とつながり、考える力を養ってくれた」という意見が多かったです。幼少の子は「絵本を読むと喜んで聞いてくれた」「好きな本を読んでひらがなを覚えた」という回答もありました。本を読むことで、知識や語彙を増やすだけでなく、頭の中にその世界のイメージを膨らませることや、細やかな人の気持ちを考えることもできます。

次点は「DVD・VIDEO」(13)でした。NHKの幼児番組「おかあさんといっしょ」や「まんが日本昔ばなし」「サザエさん、ドラえもん、ちびまる子ちゃん、ポケットモンスター、アンパンマン、他」のアニメで日本語に触れ、歌や風景、生活や行事を子どもたちは知ることができます。「お笑い番組で笑いのツボを知った」「クイズ番組

で知識を増やした」といった回答もありました。録画して送ってくれる祖父母や親せき、友人たちに感謝です。



続く「マンガ」(10)も本の仲間ですが、別カテゴリーにしました。理由としては「気軽に日本語に触れられる」「わかりやすい」「学習マンガから学べる」「少女マンガでかわいらしい日本語がわかった」「会話の中で日本語を覚えた」など、活字ばかりの本よりもなじみやすい絵を主体にしたマンガの効果も、日本語教育には大きいようです。「マンガで得た知識は帰国後の学校生活に役に立った」という意見もありました。

「補習校とその宿題」(9)も日本語学習には大きなウエイトをめています。「日本語で授業を受けることで、日本語で物事を考えられた」「宿題をやるという大義名分で強制的に日本語の勉強をさせることができた」「漢字テストがあるから勉強できた」「日本的な社会性を身につけられた」「宿題で文章を書いた」などが主な理由でした。中には「補習校には読書の時間があって、それから読書をすすんでするようになった」という回答もありました。「毎週土曜日に補習校に連れて行くのは、親としてもしんどく、子どもは平日疲れていたから土曜日は休ませてあげたかったけれど、これを怠けたら日本語とのつながりがなくなると感じてがんばった。通わせてよかったと帰国してからしみじみ思った」という意見もありました。これには多くの方がうなずけるのではないのでしょうか。

その後は横並びになりますが、「日本人の友人と遊んだ」「かるたやゲーム」「通信添削」「公文」(6)となりました。日本人の子ども同士遊ぶことも大切なことです。大人が介在しない子ども同士の活動で、子どもたちはそれぞれが多くのことを学びます。日本人が少ない地域では、なかなか集まって遊ぶのは難しいので、補習校の放課後、子どもたちが残って遊ぶということもよく聞きました。「かるたやゲーム」の理由は、「ひらがなを覚えた」「オリジナルゲームでカタカナや漢字を覚えた」「日本一周すごろくゲームで日本地理や特産品を覚えた」「百人一首を親子ではりきって覚えた。帰国後の国語や古文、日本史への興味につながり、自信となった」との理由でした。家族団らんの中で直接学習にもつながり、一挙両得ですね。「通信添削」では海外子女教育振興財団のものやベネッセの教材が、また「公文」では国語の教材が役に立ったとの意見でした。

「家庭内でのおしゃべり」「日本語のテレビ放送」「現地の日本の塾」(5)で日本語に触れることも大切です。親

子の会話はもちろんですが、きょうだいの会話の中で、「下の子が上の子の様子をうかがい行動した」「自慢や愚痴などの言い合い」など年少の子が年長の子の言葉や行動を真似することで学ぶこともたくさんあったことでしょう。NHK や TV ジャパンなどの衛星放送を利用して、ニュースやドラマなど日本の番組を観ることで、現在何が起きているのか、どのようなものが流行しているのかを捉え、日本への関心を持続させることも必要なことです。「大河ドラマを見て歴史に興味を持った」「朝の連続ドラマで戦時中の様子や大事な言い回しを知り、日本人の心に触れられた」といったものもありました。「現地の塾」では特に作文指導が役に立ったようです。正しい漢字の使い方や表現などをはじめ、書くために新聞記事や評論、本を読むといった広がりもできたようです。

「漢字検定」(3)は漢字の勉強のモチベーションとなったようです。「動画」「WEB サイト」(2)などはここ数年で充実してきましたが、依存の危険性もはらんでいますので、上手に利用するとよいものでしょう。童謡などの「テープ・CD」もきれいな日本語を覚えるにはよい教材に思えます。

「その他」(10)には次のようなものがありました。祖父母への近況報告を中心とした「新聞づくり」「手紙」、カタカナがたくさんでくるので覚えたという「ポケモンカード」、言い回しや漢字の正しい読みが身につく「教科書音読」、視覚的に日本語が学べる「PC ソフト」、「ひらがなドリル」や「絵日記」、学校での「読書運動」がきっかけで本好きになった、「日本人の指導者からの習いごと」、日本人の集住地域がある滞在国では「日本人コミュニティのイベントに参加することで他の日本人と話すチャンスを得て、刺激も受けられた」というものでした。「特になし」(1)もありました。

#### ・まとめ

赴任国の違いで、言語や在住邦人数など条件は大きく違うので、一概にこれが特効薬だといえるものはありませんが、それぞれの家庭が日本語教育の重要性を受け止めて、自分の子どもに合わせた工夫をしていたことがわかりました。回答にあった、親子でオリジナルゲームの製作とか、一緒に新聞を作ったこと、競って百人一首を覚えたことなどは、子どもだけでなく親も一緒に楽しめる素敵なことだと思います。自分の子どもが好むもの、興味を持ちやすいもの、持続可能なものを、親子で一緒に探し、それを通して「読む・書く・話す・聞く」を子ども自身がバランスよく発展させられるようになれば、日本語学習はうまくいくのではないのでしょうか。

ある 20 歳の帰国生は、親の仕事の都合で、いくつもの国を転々としました。トータルでは日本語を教育言語とした学校に通った期間のほうが少ないそうです。ところが彼の話す日本語は、敬語もきちんとしていて、日本でずっと生活している若者以上にボキャブラリーが豊富で、こちらもよく知らないような古い言葉や難しい言葉も時折使っていました。彼はこう語ります。「小さい頃からドラえもんが大好きで、それからいろいろなマンガを読むようになり、祖父が送ってくれたアニメのビデオは全部覚えるほどに見ていました。興味はライトノベル(若年層向きの小説)に移り、その後、純文学などの小説も面白くなり、今でも暇さえあれば活字を追っています。サークルで同人誌なども作っています」。これはマンガが興味や関心のスタートとなり、それが広がり、自分自身の力となった成功例なのでしょう。彼の母親は「マンガばかり読んで勉強しないからすごく心配したし、つい怒ってしまった」と笑います。このように先がみえないことで不安になる親の気持ちもよくわかります。

子どもの興味のあるものには、頭から「ダメダメ」とは言わずに、「何がそんなに面白いのか、熱中できるのか」と関心を寄せ、話を聞くのもよいことかもしれません。一緒に子どもの好きな DVD を観たり、同じマンガの本を読んで感想を言い合ったり。そのような身近なことからも、会話が增え、調べることや考えることへと発展することでしょう。帰国したら日本語での教育が待っています。これを忘れずに、海外在住の間も、無理せず長く、日本語の保持や伸長のための楽しい努力を親子でぜひ行なってほしいと思います。

## 異文化でドッキリ! <道具編>

毎回驚きっぱいの異文化でドッキリ。今回は日本ではあまり見かけない道具にまつわるお話です。

英語の先生の家で、アップルピーラーを見たとき、これぞアメリカ!と思いました。リンゴを突き刺してハンドルをくるくるするだけで、皮がむけて芯が取れてスライスまでできる。なんと便利。ただかなり重くて大きい。使う頻度と日本の家のスペースを考えて、購入は断念しました。(アメリカ)

スペイン料理にはオリーブオイルと塩に他の食材を混ぜたサルサ(ソース)が多く使用されます。これらを混ぜる際にモルテロという白いすり鉢を使います。にんにく、オリーブオイル、塩、トマト、松の実などをすりつぶしたサルサ・ロメスクを、焼いたカルソツツというネギにかけて食べる料理は、カタルーニャ地方の冬の定番です。(スペイン)

クリスマスツリーに本物のモミの木を使う家が多いので、大きなモミの木をがっしりと固定し水も補給できるツリー専用のスタンドが各家庭にあります。12月に入ると郊外のツリーファームに行き、お気に入りの形や大きさ、香りの木を選び、車にくくりつけて持ち帰ります。家でツリースタンドにセットし飾り付けると、家中それはもう神秘的な森の香りで包まれ、素敵なクリスマスの準備が整います。(カナダ)

市場や道端ですぐに食べられる状態でパイナップルが売られています。そのときに使われるのが、刃がV字になった小型ナイフ。彫刻刀の三角刀を少し大きくしたようなこのナイフで、皮を薄く剥いたときに残る茶色のブツブツの部分を螺旋状に綺麗に取り除きます。見た目も綺麗、食べても引っかけがなくて食べやすいです。(ベトナム)

青パイヤサラダのソムタム作りに欠かせない道具がクロックとサークです。クロックは日本のすり鉢よりかなりシャープな円錐形です。この中に食材を入れて、サークというすりこぎのような棒で叩きます。タイ生活の記念に購入しましたが、日本では素朴なインテリアとなってしまう、本来の力を発揮していません。(タイ)

エスプレッソコーヒーは加圧がポイント。家庭では3段に分かれた小さな金属のポットのようなマキネッタで作ります。一番下に水、真ん中にコーヒーの粉を入れて直火にかけます。すると沸騰した水が蒸気圧で、コーヒーの粉を一気に通り抜け上のところではエスプレッソができるという仕組みです。最近ではカプセル式の家庭用マシンも普及してきているようですが、「一番おいしいのはやっぱりカフェの高圧マシンで入れたもの」と言う人が多いです。(イタリア)

美味しい紅茶を入れるには、まず、ポットとカップを温めます。その後ポットに茶葉を入れ、沸騰直後の熱湯を一気に注ぎます。ここでのいよいよ英国生まれのティーコージーの出番。これは、ポットに覆いかぶせて保温し茶葉を蒸らす、いわばポットに着せる布やニット素材のコートのようなものです。数分待てば黄金色の薫り高い紅茶の完成。これだけ高温にこだわる紅茶、本格的に味わうにはティーコージーは必須。イギリス人の強いこだわりが感じられる道

大味で大きなアメリカの苺。そのヘタを取るための、見た目も苺のようなストロベリーハラー。ヘタのような緑のボタンを押すと4本の刃が出て、苺のヘタの部分に差し込み捻ると、出ていた刃が中に引っ込み、切り取ってくれます。もう一度緑のボタンを押すと切り取ったヘタは出てきます。便利ですが、日本の小さな苺に使うときは、実を取り過ぎないように気をつけてくださいね。(アメリカ)

## 海外の学校を紹介します

### ブラッセル日本人学校

A. Y.

私が小学校 4 年生の夏から約 5 年間通ったブラッセル日本人学校(The Japanese School of Brussels a. s. b. l 略称 JSB)は、ベルギーの首都ブラッセル東部の閑静な住宅街にあります。JSB はブラッセル中央駅からメトロで 20 分くらいのポーリュエ駅の目の前に位置しています。

1979 年に創立され 30 年以上の伝統のある学校で、月曜日から金曜日までの全日制と土曜日の補習校に分かれていて、それぞれ小学 1 年生から中学 3 年生までの約 300 名の児童・生徒が在籍しています。普段はなかなか交流する機会がないのですが、秋に開かれるマロニエ祭ではみんなで一緒に楽しみました。

私の在籍していた全日制では、小学 1 年生から中学 3 年生までの縦割り班があって、体育祭などの行事だけでなく、毎日掃除を一緒にしたり毎月のように開かれていた「仲良しランチ」をしたりして他学年との交流を深めることができました。日本の学校に比べて、男子と女子や先輩と後輩の関係が近く、みんな仲が良かったように思います。海外にある日本人学校ということで人の入れ替わりが頻繁で、毎学期のように転入生と転出生がいて最初は驚きましたが、おそらく日本では決して出会うことのなかったと思われる友達と出会えたことは大切な思い出です。

JSB の学校行事ですが、1 学期にはサマースクールや修学旅行があり、2 学期には体育祭、マロニエ祭、マラソン大会、合唱祭、社会見学、3 学期には現地校との交流学习がありました。小学校の修学旅行では、6 月に 2 泊 3 日でオランダに行きました。キンデルダイクで風車小屋を見たり、デルフト焼の工房でタイルに絵付けしたり、アムステルダム美術館とアンネの家の見学、チーズ作りや民族衣装を着ての記念撮影など盛りだくさんでした。クラスのみならずもっと一緒にいたいと思うくらい楽しかったです。



また、行事の多い 2 学期の中でも特に印象深いものが毎年 10 月に開かれる合唱祭でした。以前は学校のホールで行われていたのですが、私が小学 6 年生の時から JSB の近所の大きな教会で行われるようになり、家族や学校の関係者だけでなく現地の方も聴きに來てくださるようになりました。私は 6 年生の時から中学 2 年生まで毎年伴奏を担当させてもらいました。伴奏のために夏休みからコツコツとピアノを練習し、本番前は毎日のようにクラスみんなで練習して大変なことも多かったです。当日無事に演奏を終えた時の達成感は今でも忘れられません。中 2 では合唱祭の後、みんなでハンバーガーを食べに行ったのもいい思い出です。

ほかにも印象深い思い出として、サッカーの日本代表の親善試合がベルギーで行われたことが挙げられます。オランダチームとの親善試合の後に公開練習があって、学校中の生徒が見に行きました。学年ごとに選手たちと記念撮影をしてもらい、練習後に香川選手や川島選手のサインまでもらえました。私はサッカーに詳しくなかったのですが、代表の選手たちがとても気さくに接して下さったおかげで興味が持てました。

このように JSB に在籍していた 5 年間で、日本にいたら経験できなかったことをたくさん経験でき幸せだなと思います。今後の人生にもこれらの経験を生かしていきたいです。

## 学校案内編集部より

### 『帰国生への学校案内《関西》2017』の発刊を終えて

ご支援ご協力をいただいた皆さまのおかげで、2017年版を無事発刊することができました。心よりお礼申し上げます。今年初めの編集部会議で「2020年の大学入試が変わるらしい。それで何がどうなるのだろう」というところから、テーマを「大学入試改革の流れの中で」とし、取材先の先生方にもお考えをうかがいました。熱い思いで取り組んだ編集部員の声をお届けいたします。

- ◇新しい会員を迎えて、今年も皆の力でよい本ができ上がりました。自画自賛ですが本当です。
- ◇新規校、新コラムあり。リストもさらに見やすくなりました。
- ◇さらに進化した一冊になりました。この本を必要とされる、より多くの方のお手元に届きますように。
- ◇関西の学校教育の動向を、編集する立場から追いかけていくことができ、感謝しています。
- ◇帰国生の母たちが心をこめてつくりました。学校探しでお困りの方、ぜひ読んでみてください。
- ◇せいっぱいの情熱と力を注ぎました。帰国前後のご家族にエールをおくります。
- ◇取材でたくさん先生方にご協力いただきました。ありがとうございました。
- ◇かけはし会員のチームワークの結晶ともいえるこの本が、皆さまのお役に立てますように。
- ◇子どもたちと学校とのよい出会いがありますように。



## レッツトーク 2016 秋 実施報告

10月24日に大阪で「レッツトーク 2016 秋」を開催しました。これは「かけはし会員と気軽におしゃべりしましょう」というどなたでも参加できるイベントです。帰国後や渡航前の方々がお見えになり、お互い状況は違えども、海外生活や子どもの教育という共通の話題に各テーブルで大いに盛り上がりました。

経験者の滞在国での生活の知恵や耳寄り情報、子育ての泣き笑い体験を聞いて、初めての海外赴任を控えている方が、「幅広くいろいろなことが聞けて大変参考になりました」と嬉しい声を残していかれました。帰国された方からは、「帰国生ならではの悩みや疑問にお答えいただきありがたかったし、お話しできて楽しかったです」「帰国して時間が経過してしまいましたが、久しぶりに海外生活の話をするのができて本当に楽しく過ごせました」など感想をいただきました。帰国された方の海外生活の話題がそのまま渡航前の方へのアドバイスになった場面もあり、よい情報交換の場となったようです。また、子どもの学校生活や受験に対して真摯に向き合われている皆さんの姿勢に「母は強し」と感じました。





\*写真はプライバシー保護のため画像処理をしています。


「レッツトーク」は気兼ねなく話せる貴重な機会です。次回2月に開催しますので、ぜひお越しください。


## 会員のつぶやき





 運動会、遠方から両方の祖父母が駆けつけてくれました。毎年大変なのは、そう、お弁当。8人分の量を四苦八苦して作ります。駐在中に通ったインターナショナルスクールでは運動会がなくて寂しいと思っていたくせに、今では「弁当作りがなくて楽だった、よかったな」と懐かしく思います。(つぶやっきー)


 アメリカから帰国してはや2年。記憶が薄れていく中、ハロウィンが来るたびに、3人の子どもたちと共に4時間かけて家々を回り、計600個のお菓子をもらったことを思い出します。ハロウィンのためだけにアメリカに行きたい! 日本の学校、休みになんないかな… (つるちゃん)


 歳を重ね、ますます、人の名前と顔がすんなり頭に入ってくない私。子どもが所属していたチームの試合の応援のとき、現地のママに名前でお声かけしてもらっても、笑顔とハイ! とハグで、その場を乗り切っていました。(でも、海外だけじゃなく、今でもかも?!)(チョコ大好き)

 二度の海外赴任後、ご縁がありここ関西の地へ帰国。文化の違いにビックリ!! 言葉、習慣、価値観、食文化…と海外生活に匹敵するほど。こりゃあ三度目と思って関西カルチャーを楽しむしかない!! すっかり関西弁をマスターした息子たちに遅れまいと日々奮闘の母です。(Cross Road)

 自治会で敬老の集いを企画して、私も一緒に100歳体操をしました。すると80歳のマダムから「あなたはとても体が柔らかいわね」とお褒めの言葉。でも、なんとなく羨ましい、負けたくないという雰囲気も感じて。この気持ちが若々しさの原動力になるんですね。私も見習わなくては! (琵琶湖のあゆ)

 足利尊氏を「アシカガタカシ」と平然と呼んでいた娘たちも、帰国2年目、そろそろ普通の日本人に…と思いきや! 先日小6の末娘が「ママ〜、日本ではChristianのこと、クリシタンって言うの?」と聞く。あー今歴史で江戸時代習ってるから?! まだ注意が必要です。(慌て母)

 先日、東京ビッグサイトの国際航空宇宙展を見に行ってきた。4年に一度、日本では16年ぶりの開催ということで私は以前からワクワクしていた。会場はあまりにも広く、世界中から700社も集まっていたので全部を見ることはできなかったけど、いくつか講演を聞いたりして最先端の航空宇宙事業に触れられたようでうれしかった。普段の生活では味わえない有意義な時間だった。(メープル)

 つい最近あるスイス人とお話ししていたときのこと。ゴスロリファッションの女の子たちを見かけて、「彼女たちは親に反抗したいの?」と聞かれびっくり! 「そういうファッションが可愛いと思う価値観を持っているだけで…」などと説明しても理解してもらえず。文化の違いはおもしろい?! (Candy ママ)

## 編集後記

☆ 「この世で一番好きな食べ物はみかん」と豪語する私。この時期 3Kg 1 ユーロ (約 116 円) で買える。日本では遠慮していたけどイタリアでは食べ放題よ。幸せ〜! 手のひらも足の裏もまっ黄っ黄。(ままつたり)

☆ 階段を駆け上がって、「2階まで私はいったい何をしに来たんだっけ」とは、最近よくある私の行動。気を引き締めないとそろそろ危ないな。(ごくみ)

☆ この夏、初めて上海に行きました。言葉が全く聞き取れず、分からないって本当に大変。友だちに完全におんぶに抱っこでした。住んでる皆さん尊敬します。(マッキー)

☆ 大統領選挙で今日もアメリカ中がハラハラ。なんと明日が投票日! 私までドキドキ… (アルト)

☆ 「臨機応変」日本人は苦手だな〜とつくづく感じる今日この頃。そういう私も日本人… (あろま)

☆ 「ブツメツって何?」と21歳の愚息。漢字を見せたら「フランスがほろびる…」とボソッと… (トホホの母)

会報 Vol. 36、お楽しみいただけましたか? ご意見、ご感想をかけはし事務局までお寄せください。

**好評発売中**

## 関西圏学校情報誌 『帰国生への学校案内《関西》2017』

◆帰国生の親が実際に訪問取材した、情報満載の学校案内です。

◆近畿2府4県の小・中・高 約70校と教育委員会を詳しく紹介

《特集記事》かけはしセミナー「教育改革のうねり—文部科学省も本気になった?—」要旨  
特別リポート「グローバル人材とは—保護者の視点—」

《基礎知識》出国前、帰国時に知っている则安心できる知識集です。

出国前に気をつけること、日本の学校への入学・編入学、英語保持教室の情報 など

《取材記事》会員が学校を直接取材して書き上げています。

受験情報、学校の特色、帰国生受け入れ、在籍帰国生・保護者の声、先生のお話 など

《大学情報》今どきの大学入試、帰国生の入試基礎知識などの情報、主な大学の帰国生特別入試、  
編入時期別受験可能実施大学リスト、また、予備校情報も含めて紹介。

《リスト》 関西圏 国立/私立の小中高校他、語学保持教室・塾・通信教育、本誌掲載校入試関連情報一覧

《コラム》 「IBDP 履修者に聞く」「海外での習いごと」「お家のトラブル」「海外での危機管理」

**A4判・400ページ 2,900円(税込・送料別) 図書コード ISBN978-4-9908226-1-3**

**国内・海外発送いたします(一部書店でのお取り扱いもございます)**

**ご購入のお問い合わせは、かけはし事務局まで**



こうもりさゆり

### かけはし賛助会員のみなさま (敬称略、順不同)

- ・パナソニック株式会社 ・川崎重工業株式会社 ・株式会社立花エレテック
- ・早稲田摂陵中学校・高等学校 ・立命館守山中学校・高等学校 ・雲雀丘学園中学校・高等学校
- ・高槻中学校・高等学校 ・啓明学院中学校・高等学校 ・梅花中学校・高等学校
- ・須磨学園高等学校・中学校 ・関西インターナショナルハイスクール ・アズ留学センター
- ・小島勝(龍谷大学名誉教授、元異文化間教育学会会長) ・オンライン個別指導 You-学舎
- ・藤内博(元リオデジャネイロ日本人学校長、大海研顧問、全海研幹事、帰国子女教育を考える会事務局員)
- ・匿名(個人) ・匿名(団体)

<関西帰国生親の会かけはし編>

Email: [kakehashi@kansai.email.ne.jp](mailto:kakehashi@kansai.email.ne.jp) URL: <http://www.ne.jp/asahi/kakehashi/kikoku/>

copyright © 2016 関西帰国生親の会かけはし All Rights Reserved